

読書

題字は刻字作家・安達春汀さん

切符をしゅーっと通した瞬間『ああ、わたしはどこにでも行けるんだ!』という気持ちになる。それが大きな楽しみ」

下調べはほとんどしない。東京から遠ければ、ホテル付きの格安旅行パックを買う。ホテルに入ると、まず近くのデパ地下で夕食を買い、テレビを見ながら食べて寝る。足裏マッサージも好き。次の朝は連続テレビドラマを見て…。

ひと月に一回、各都道府県を訪れる。ほとんどは日帰りから二泊の短い旅。あまり目的を作らず出発し、旅先で芽生えた思いを書き留めた。四コマイラスト付きのエッセー四十七編には、ゆるい旅の楽しみ方がある。

「出発する時の気持ちが晴れやかなんです。改札で

著者に聞く

「47都道府県

女ひとりで行ってみよう」

益田 ミリさん



ますだ・みり 1969年生まれ。イラストレーター。

日常持ち込み旅を満喫

う努力をやめた。

「読み返してみたら『人とふれあいたくない』という言葉が多く出てきて、普段の生活でもそうだなあと思いました」と笑う。

たしかに、普段やり付けないことを旅先に持ち込むのもおかしいことだ。一九七〇年代、「ディスカバー・ジャパン」という旅のキヤンペーンがあった。「人とのふれあい」「自分探し」などの言葉も、旅について回った。しかし、旅に意味を求めない益田さんに、共感する人は多いだろう。

「四十七の旅を始めたのは、何かをやり遂げたくて。子どもの時から何をやっても続かない。何かを続けたら人生が輝くものになるのでは、という気になるんですが、その思いが強すぎたんですね」

大阪府生まれ。短大を卒業後、働きながらイラストの学校に通い上京。一昨年出した漫画「すーちゃん」は「夫なし男なし三十路半ば」の日々を描きヒットした。働く女性の心を細やかに描き、熱い支持者を持つ。「すーちゃん」は作中の人。わたしより心が広くて優しいんじゃないですか」

(幻冬舎・一三六五円)